

小学校中学年教科担任制移行期における 学級担任としての授業実践

ー 毎授業における子ども振り返りノートから ー

学籍番号 249213

氏 名 十倉 蓮

主指導教員 芦田 祐佳 先生

副指導教員 四辻 伸吾 先生

1. 背景・動機

実習校（教育大学附属小学校）では、国の動きより先行的に、小学4年生から教科担任制が導入されていた。児童は教科によって教師が変わる様子になれている様子であり、授業に取り組む姿勢は積極的かつ真面目に取り組んでいた。

しかし、授業を見学するなかで、一部児童が授業中に戸惑う姿が見られた。ある教師は、教師の指示を待たずに、ノートを開いている児童へポジティブなフィードバックを返していたが、別の教師は、教師の指示を待たずにノートを開いている児童へ「ノートを開かないように」と指導していた。児童はこの指導の違いに対し、戸惑いを感じている様子であった。

このことから、小学校教科担任制下では、児童の困り感などが潜在しているのではないかと思ひ、本研究に取り組んだ。

2. 先行研究

2.1 国の動き

中央教育審議会（2021）は「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」で、初めて「小学校における教科担任制の導入」を指摘した。そして2024年には、「『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）」の中で、小学校高学年だけでなく、中学年でも高学年や中学校との接続を考えて、教科担任制を導入すべきと指摘している。このように近年では、小学校において教科担任制を拡張する動きが盛んに見られる。

2.2 教科担任制の制度面・学級経営面について

先行研究は、小学校教科担任制における課題や懸念を指摘している。まず制度面については、専科教員の加配や教員間の連携を課題視する研究が見られる（吉村，2021）。また、学級経営面では、教科によって教師が変わることへの児童の不安（吉村，2021）や、学級担任との関係形成に対する懸念（佐々木ほか，2023）、学級担任が包括的に指導・支援してきた道徳教育や児童の人格形成への影響（吉村，2021）が指摘されている。

3. 研究1・2について

以上の課題を踏まえ本研究では、小学校中学年教科担任制下で児童の教師への信頼感を高めるための教育実践を考察し、その効果検証を行った。

3.1 研究1

実習校の当時4年生の児童105名と担当教師8名を対象にアンケート調査とインタビュー調査を行い、教科担任制下で教師が意識している指導・支援のあり方とそれに対する児童の受け止め方や児童が求めていることを調査した。その結果、教師は集団を意識して指導や支援を工夫していたのに対し、児童はより個別的な支援を求めていることが明らかになった。

3.2 研究2

研究1の結果を踏まえ、研究2では、児童個人のニーズ把握とそれに対する支援を拡充するための手立てとして、学級担任として「ふりかえりノート」を使用した実践を行った。「ふりかえりノート」とは授業時のノートを使用し、ノートの最後に、児童が困っていることや気になること、授業での疑問点を自由に記述するものである。それに対して教師がコメントすることで、教師と児童をつなぐ架け橋として機能し得る。このふりかえりノートを4月から12月までの8ヶ月間で国語・理科・道徳の授業で行った結果、以下の効果が見られた。

第一に、「ふりかえりノート」の実践前後で学級担任に対する児童の信頼感は有意に変化しなかった。この結果は、単一の取り組みを行うだけで児童の信頼感が顕著に向上するとは言えないことを示唆するものであった。

しかし第二に、「ふりかえりノート」の記載内容をテキストマイニングの手法を用いて分析したところ、児童は授業内容に関連する体験や教科書に載っていない情報に対して興味関心を抱いていることや、教師の意見や見解を知りたいと感じていることが明らかになった。

第三に、「ふりかえりノート」の記述から見えてきた児童のニーズをもとに、学校生活上の指導や授業資料の作成、ならびに授業実践を行い、その様子を事例研究したところ、教師の児童理解が深化したことで授業や生活に対する児童の理解や興味関心が拡がることが示された。

4. まとめ・考察

先行研究では、小学校における教科担任制は教科ごとに教師が変わる不安感を児童に助長する可能性が示唆されていた。本研究では教師の信頼感を教科別、時期別に測定したが、先行研究で指摘されているような有意な結果は見られなかった。しかし、インタビューや「ふりかえりノート」の内容を質的に読み取っていくと、数量的な分析では把握できないような、児童の個別具体的な悩みや要望が浮かびあがった。そして、そうした児童個人のニーズに応えるべく、「ふりかえりノート」を用いた実践を行ったところ、教師への信頼感が数量的に有意に向上することはなかったものの、「ふりかえりノート」に記された児童の既有経験や興味関心から、授業や生活指導を改善するための視座を得ることができた。以上より、小学校中学年の段階から教科担任制が展開され、児童と関わる時間や機会が制限されていたとしても、教科・授業ごとに「ふりかえりノート」を実施すれば、教師と児童の信頼関係の構築や児童理解が促進される可能性が示された。